



日本盆栽作家協会会報

第18号

平成22年12月1日



第18回作家展

会期／平成21年12月4日(金)～7日(月)
 会場／春花園 BONSAI美術館
 主催／日本盆栽作家協会

作家精神の高揚と研究・研鑽及び盆栽作家の社会的地位の確立を目的として開催される作家展も回を重ね、18回展が盛大に開催されました。大変すばらしい作品がそろい、これからの更なる研鑽と発展が楽しみです。



臯月(大盃) 小林國雄 広東切立隅入長方



杜松 山田登美男
 紫泥剣木瓜式



かりん 野上寿明
 キンヨ(新渡)



真柏 今井千春 和正方



《世界初！ 公立の盆栽美術館》

東洋の神秘、古色で気品漂う梅花は、私共では代々、「梅の香を聞く」と伝えております。戦国時代には、「若武者が初陣に立つ勇姿」などと形容されており、寒中の花としては、凛々しい表現がまことに面白い。梅が馥郁とほころぶ1月頃は、私は新春の喜びをいつも感じます。さて、海外で「ボンサイは素晴らしい」と言われて久しくなりました。しかし、国内では伝統文化として約1000年の歴史がありながら、今日まで公立の盆栽美術館が無かったのは、いかに寂しい限りでありました。二十数年前から設立運動をしておりましたが、そのかいてもあって、この四月、さいたま市大宮盆栽美術館がオープンしました。大変に喜ばしく、市をはじめ、さいたま商工会議所、そして多くの市民の皆様方のご協力によるものと感謝の気持ちでいっぱいです。地域資源を生かして、悠久の美の殿堂となつて発展してほしいと願っています。盆栽は、我が国の原風景を盆上に再現して鑑賞するものです。盆栽美術館には、日本固有の植物も多く、貴重な高山植物もあります。市民にとっては、居ながらにして遊山、溪谷に浸れる快適な場所になることでしょう。他方、世界の盆栽愛好家にとっては、盆栽村という盆栽の名所にふさわしい、待望の美術館の誕生であります。その役割は大きく、観光資源として経済効果も期待できます。次世代に受け継ぐ意義ある施設の誕生を素直に喜びたいと思います。

日本に待望の 盆栽美術館 誕生！

(清香園園主)
山田登美男

2010年 3月28日(日)

さいたま市 大宮盆栽美術館 オープン!!



所在地 〒331-0804 さいたま市北区土呂町 2-24-3
TEL 048-780-2091
ホームページ <http://www.bonsai-art-museum.jp>
開館時間 9:00~16:30 (3月~10月)
9:00~16:00 (11月~2月)

休館日 毎週木曜日 年末年始 展示替え期間
観覧料 一般：300円 高大生・65才以上：150円 小中学生：100円



五葉松
須藤雨伯
紫泥外縁三足丸



宮様カエデ
鈴木英夫
和樽円

黒松 田中泰道
中国(新渡)



五葉松 阿部健一
行山剣木瓜式



文人木の研究

「一枝よく万枝に優る」



日本盆栽作家協会会長
山田登美男

文人盆栽と一言というのはたやすい。しかし、文人木ほど難しい形態はないように思える。これまでの盆栽生活人生で（約45年間）で文人木らしき盆栽をつくったのはたった10鉢位かと思うが、年と共に少しづつ考え方が変わってきたように思っている。

文人といわれる人は、どういう人をさしているのだろうか？ 孤高な人とも考えられるが？ 広辞苑では文人について次のように述べている。

1. 文筆にたずさわる人
2. 詩文・画など文雅などに従事な人
3. 文人、墨客、南宗文人風など趣旨とする、投入瓶華を主とし盛物や盆花もする

「文人画」文人が余技として描いた絵、精巧な色彩より墨色や筆線を重んじ、中国では古くからその気韻、風雅をとうとび、多の様式が行われた。文人画は南宗と同義になり、わが国では江戸時代に入って独特の発展が遂げた、とある。

また、文人といわれる人たちが必ずしも、文人盆栽を好んだわけでもないようだ。文人の中にもいろいろあるようにも思う。特に、文人木として素晴らしい作品との出会いがなければ、と考えるとまた

別のとらえかたがあるのかもしれない。私の持論でもある「作家なくして作品なし、作品なくして芸術なし」に共通するのかもしれない。

文人木に対してもっと具体的に述べると、実性仕立てと山採り素材とは大きく異なるのである。

実性仕立ての場合

1. 鉢持ちこみが長く、自然態であること
2. 厳しいまでも、中浅鉢で培養すること
3. 肥料はひかえめで天工と人工にめぐまられて、素材の段階で文人風に幹に曲線を入れ、枝くばりと品格をそえること
4. 空間処理を大切にすること
5. 風趣、風韻を重んじること

山採りの場合

1. 風雪をしのいだ枯姿な幹味で細身ながら、精神的な力強い動きと美しさが感じられる素材
2. 松らしい表現力と、全体的に姿が余韻を感じられること
3. 一本木が理想で、気品が感じられること

このようなことを述べると、思い浮か



松は端正で気高い君子のようである。凜々として近よりがたいものがある。

ぶのが「潤底の松」と云う言葉である。

松は独立木である以上、同じ顔をした葉性は少なく、ほとんど個性的な特徴がある。その親木の自生地は高山の深山であり、秋に松毬から飛び出した種子が、四方八方に風につれて運ばれてまいります。あるものは運悪く谷底に落ちてようやく中洲にたどり発芽したとしても、最悪の条件であり、いくらかの光線を求めて厳しい条件に生きることになります。

常に上を向いて風雪に打ち勝って、年輪を重ねるその努力によって培われた幹味と枝味は、私共のような盆栽作家には理想的な素材といえますが、大変に少ない。安定した大地に生きるものと比べると、谷底からはい上がって、今にきつと大木になってやる！そのような生命力を感じさせる姿をさして「潤底の松」といい、この言葉は私の心にしみるものがあります。

長い年月によってのみ得られる尊い松の素材は、私共は大切に扱う必要があります。

「一枝よく万枝に優る」とは文人木をさしておりますが、基本的には自然の力を借りて、自分の感性を常に磨いて向き合い創作に心がけることが大切でしょう。



(日本盆栽作家協会常任幹事)
小林 國雄



SAKKA TEN 2010 ヨーロッパ大会

11月8日、妻と二人で成田を出発、イタリアへ向かう。ローマ空港には、作家協会の新会長となったロレンツォ夫妻と通訳の村木さんが出迎えてくれた。

ロレンツォ君は十数年前に私の園で盆栽の修行をした人である。素直で人間性も技術も素晴らしいものがある。特に、美意識が高い。1996年にイタリアに初めて招かれたのは彼の推薦があったからである。

開会の三日前に到着し、ローマとトスカーナにある彼の盆栽棚を拝見、山取りされた素晴らしい素材がたくさんあった。

大会はパドヴァの町の中心にある文化センターで開催された。仮設の床の間が7席と一般の陳列棚に盆栽と水石がきれいに飾られていた。初日は、十名のワークショップを行った。夜に開会式が行われ、山田会長の挨拶が大きなスクリーンに映し出された。私は床の間飾りの指導を頼まれ、羽織袴で景道を披露した。

スペイン、ポルトガル、ドイツ、オーストリア、スイスなどヨーロッパのいろいろな国からの参加者がいた。

毎回、大会の通訳はトリーニ先生のお世話になっている。先生は大学で日本の古典の教鞭をとっている。日本語の奥深いところまで通訳できる。奥様の初美さんは聡明で楽しい方である。

最初のデモンストレーションでは三本の樹が用意され、三人の作家に私が指導するというやり方であった。驚くことに大きな会場の席は全部うめつくされていた。

2012年にはスペインのペニスコラでヨーロッパ大会を開催する予定だそうである。こちらの人は盆栽の形だけを追求するのではなく、景道を学び、精神面での盆栽道を極めようとしているということとを今回の大会でも強く感じた。

※ P15のカラー頁もご参照下さい。



(上) スタッフの皆さんとディナー



(上) 小林氏による床の間飾りの指導



(下) 展示場風景



(下) 展示作品



(上) 小林氏のデモンストレーション



(下右・左) 開会式風景





第3回 中国唐風盆景展



(左から) 今大会金メダル受賞 鮑氏 中国盆栽協会会長 張氏 山田氏 小林氏 申氏



展示作品



小林氏と受賞作品



展示場風景



山田登美男会長 ごあいさつ

第三回中国唐風盆景展に今回も作家協会の山田会長と私が招かれました。9月27日朝9時に成田を出発し北京で乗り継ぎ西安に向かう。

日本から唐苑に庭木を入れている輸出業者の奥村氏と小池氏も私たちと一緒に行きました。展示会場は昨年と同じ唐苑で開催された。唐苑は広大な敷地で八十万坪もある。盆栽を飾る会場もまた広く、大型盆栽が三百席も陳列されていた。

オープニングセレモニーでは山田会長が日本の盆栽界を代表して祝辞の挨拶をした。会場の外では火花が上がり踊りと音楽によるとても賑やかな開会式である。

日本の盆栽展のように、「侘び寂」ばかりを追求した高尚な趣味である事だけを掲げると、女性や若者に人気がなくなってしまうような気がする。もう少し分かりやすい華美華飾をとり入れた、中国のようなお祭りさわぎの「華のある」イベントに日本の展示会も企画するべきだと私は考える。

以前から唐苑を経営する張さんの考え方のスケールの大きさには、ただただ驚くばかりである。昨年にはなかった「林苑飛瀑」というナイアガラの滝を移したような大規模な瀑布が創られていた。また、美術館、レストラン、北京の皇帝の廟壇である天壇に模した建築物ができていた。いずれ、ホテルとゴルフ場も創る計画であると聞く。

また、来年の大会は世界大会として政府が主催となり、他の場所で開催され唐苑は第二会場となるそうである。

盆栽は中国で生まれ、日本人の美意識と感性によつて現在の形状に確立されたが、このままで行くと、日本の盆栽界の権威も危惧される時が来る。今の日本の盆栽界の現状を見ると、低迷の状態であり精神面においても衰退するばかりである。日本作家協会会員も、もともとと勉強して日本の盆栽復権の警鐘を鳴すべき人物を輩出しなければならぬ。

(日本盆栽作家協会常任幹事
小林國雄 記)



日本盆栽作家協会

伊香保・榛名山 研修旅行

2010年8月5日～6日

8月5日昼に前橋駅を出発して、連取りの松を見学。この松は、享保2年（1717年）に植えられた樹齢約300年という黒松で、その雄大さから天神松と呼ばれています。

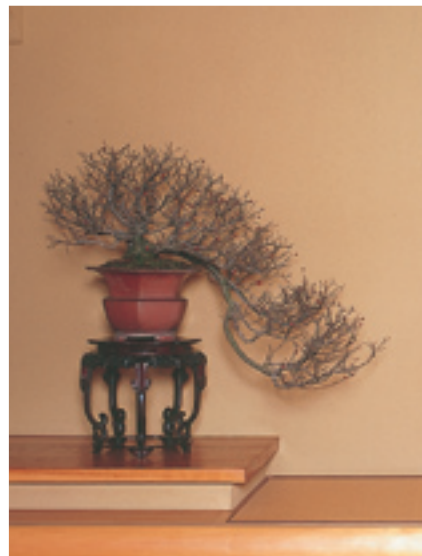
その後、樹齢450年の萩原の大笠松を見学。この松は、樹勢盛んで、枝葉が四囲に伸びた為、現在までに居室を3回程後方に引いたとのこと。そして水沢観音を見学。江戸時代（1787年）の建築と思われ、近世建築特有の華麗さにあふれています。

その後、ホテルしん喜にて一泊。

翌日、榛名山と榛名湖、榛名神社を観光。その優美な姿には、一同びっくりしました。



けやき
吹田勇雄
和楕円



かまつか懸崖 山田寅幸
朱泥六角変り鉢



かまつか 山田香織
常滑白釉楕円



野梅(初雁) 秋山 実
南蛮丸



楓石附
風間雄一
寿悦楕円



榛名神社



榛名富士と榛名湖



連取りの松の前で



水沢寺観音堂



萩原の大笠松

SAKKA TEN 2010 ヨーロッパ大会



2010年11月12日から14日まで、イタリア・パドヴァにて、SAKKA TEN 2010 ヨーロッパ大会が開催されました。

日本盆栽作家協会から、小林國雄氏が講師として派遣されました。

町の中心にある文化センターで開催され、スペイン、ポルトガル、ドイツ、オーストリア、スイスなどヨーロッパのいろいろな国からの参加者にぎわいました。

(P 8 詳細をご覧ください。)



(上左)小林氏のデモンストレーション (下)展示場風景



モクレン
尾崎将司
白交趾袋式楕円



五葉松石付 江田 博

モミジ アウエル・オートマ 和楕円



五葉松 ピーターウオーレン 南蛮鋳打丸



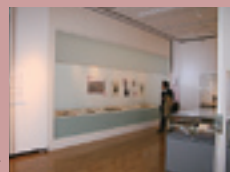
(上右) 埼玉県知事 上田清司氏のごあいさつ



展示物解説風景



美術館全景



展示場風景

大宮盆栽美術館
オープン!

2010年3月28日、さいたま市に世界で初めての公立の盆栽美術館がオープンしました。

当日は、埼玉県知事、さいたま市長、さいたま市議会議長、日本盆栽作家協会会長 山田登美男氏他、沢山の来賓の方々の出席の下、テープカットや会場披露等、盛大なオープン式典が行われました。

(P 5 詳細をご覧ください)

